

東京都立第五商業高等学校

本校の「ボランティア体験学習」・「ボランティア活動の例」について

東京都立第五商業高等学校
藤田 豊

1 はじめに

私は、本校における教科・科目「奉仕・社会体験学習」の立ち上げ、主担当として、地域との関わりや授業の進行を3年間行いました。その後、平成22年に学年担任となったため、次の先生へバトンタッチをしました。

スクールボランティアサミット2012では、「ボランティア体験学習」を実施する際の地域の関わり方とその後、生徒のボランティア活動へのサポート、ボランティア活動を行った生徒の声の紹介をします。

2 都立第五商業高校について

(1) 概要

東京都立第五商業高校は、新宿から中央線で35分程度西に進んだ国立市内にあります。文教都市であり、周辺には一橋大学や都立国立高校もあります。

1学年6クラスの編成で、生徒数は約600名。女子生徒が全体の80%を占めています。履修科目の3分の1が商業関係の科目であり、簿記・情報処理・商業経済などを学びます。約半数の生徒は、就職を希望する、昔ながらの商業高校です。

(2) 地域とかかわりのある授業

大まかには、次の通りです。

学年	教科・科目・講座名	授業内容の例
3年生	選択 商業(3単位) 課題研究・起業家チャレンジ	近隣の農業系の高校で作った野菜や加工品などを地元の商店街で販売する授業
2年生	選択 商業(3単位) ビジネスデザイン	地元商店街の各お店を生徒が訪問し、各商店の強みを取材してポスターをA3版で作成する授業
1年生	全員必修 奉仕(1単位) ライフデザイン社会体験学習	自分がどう生きていくかというキャリア教育と社会とどう関わるのかという体験学習を組み合わせた授業

3 「奉仕・社会体験学習」の実施について

地域とともに作りあげていく体験型授業を全校レベルで行うにあたり、大切にすべき点と注意すべき点を実施時期別にまとめていきます。

(1) 導入前の準備期(実施前の1年間)

授業開始前の準備において、どれだけ地域の方々や中間支援機関の方々と信頼関係を築けるかが、授業の成否のカギとなります。

①授業のねらいの明確化(4月～9月)

⇒実施主体は複数にする。一人では続かない。複数の教員で構成されるチーム構成にする。

本来は、主となる教科の教員の育成が必要。

⇒学校として、どのような体験をさせたいのか、何を学んでほしいのかを明確に。

⇒授業としてのねらいを検討しておく。

<第五商業高校・社会体験学習のねらい>

体験などの様々な機会を通じて多様な生き方・考え方に触れ、自らの将来像を広い視野と多角的な視点から形成できるようにする。また、自分と地域や社会とのかかわり方を考えるきっかけとする。

※キーワード「人とかかわり」「達成感と自信」「思いやる心」「社会のルールやマナー」

② 中間支援機関へ訪問（6月・随時訪問）

⇒各自治体にある「ボランティアセンター」などの中間支援機関へ連絡をして、上記の授業のねらいや体験のイメージを伝える。授業を行う教員間で授業のねらいが共通理解されていなくても、訪問を優先する。ただし、自分自身の思いがまとまっている必要がある。

⇒授業や活動のねらいが自分の中でまとまっているか。中間支援機関の職員とともに作り上げるという柔軟な考え方も大切。中間支援機関は様々な学校や活動先とのパイプを持っている。これを活用しない手はない。

⇒活動のイメージを伝える。実施期間・実施日数・活動人数などの基本情報

⇒生徒の実態をそのまま伝える。（適正なマッチングへのポイント）

過小・過大のいずれかで伝えると、マッチしない活動先をイメージされてしまう。

⇒活動先の候補の紹介を受ける。

③ 活動候補先の訪問（8月～12月にかけて）

⇒教員自らが、地域に出ていく。紹介を受けた活動候補先へは、ボランティアセンターなどから事前に連絡が来ているので、話はスムーズに進む。

⇒体験学習を通して何を学ばせたいのかが明確になっているか。

⇒活動候補先は、もともと高校生の育成のために存在している機関ではない。そこがポイント。

⇒教員自身の熱意はあるか。教員自身の動きも評価のポイントになっている。

⇒活動の大枠について、同じ方向を見ることができると、実際の活動へ動き出すことになる。

④ 年間カリキュラムの作成

カリキュラムの作成にあたっては、生徒の実態を知る学校側と体験学習のノウハウを持つボランティアセンターと協力して作成することが望ましい。ただし、実施主体は学校であることは忘れてはならない。活動先の方々は、熱い思いをもって動いている方が多い。そのため、学校の実態にかけ離れた理想的なカリキュラムが提示されてしまうこともある。すると学校側はその対応に翻弄されることもあるので、学校の基本姿勢を明確にすることが大切である。

（2）実施期（実施1年目）

① 体験学習前（体験学習は、実施前の事前学習にポイントがある。）

⇒生徒は、なんのためにこの活動をするのか意味合いを理解できると大きく伸びる。

活動をイメージできるような写真などの準備を予めしておく。

可能であれば、活動先の方をお招きすることを考えてもよい。

⇒実施直前に、生徒の実態に合わせ、具体的に指示をするのか、行動自体を生徒に考えさせて待つのかなど学校と体験先とすり合わせておくことが大切である。

一般的には、具体的な指示がないと動けない場合が多い。そのため、少なくとも活動当初は、行動をするために生徒が見なければいけないポイントや活動の具体的指示をお願いするとよい。

② 体験学習時（生徒が生き生き活動するために）

生徒の動きを注意深くみる。戸惑っている場合は、その原因を解消するように動く。

実は、教員の動きも活動先の評価の対象となっていることに留意する。

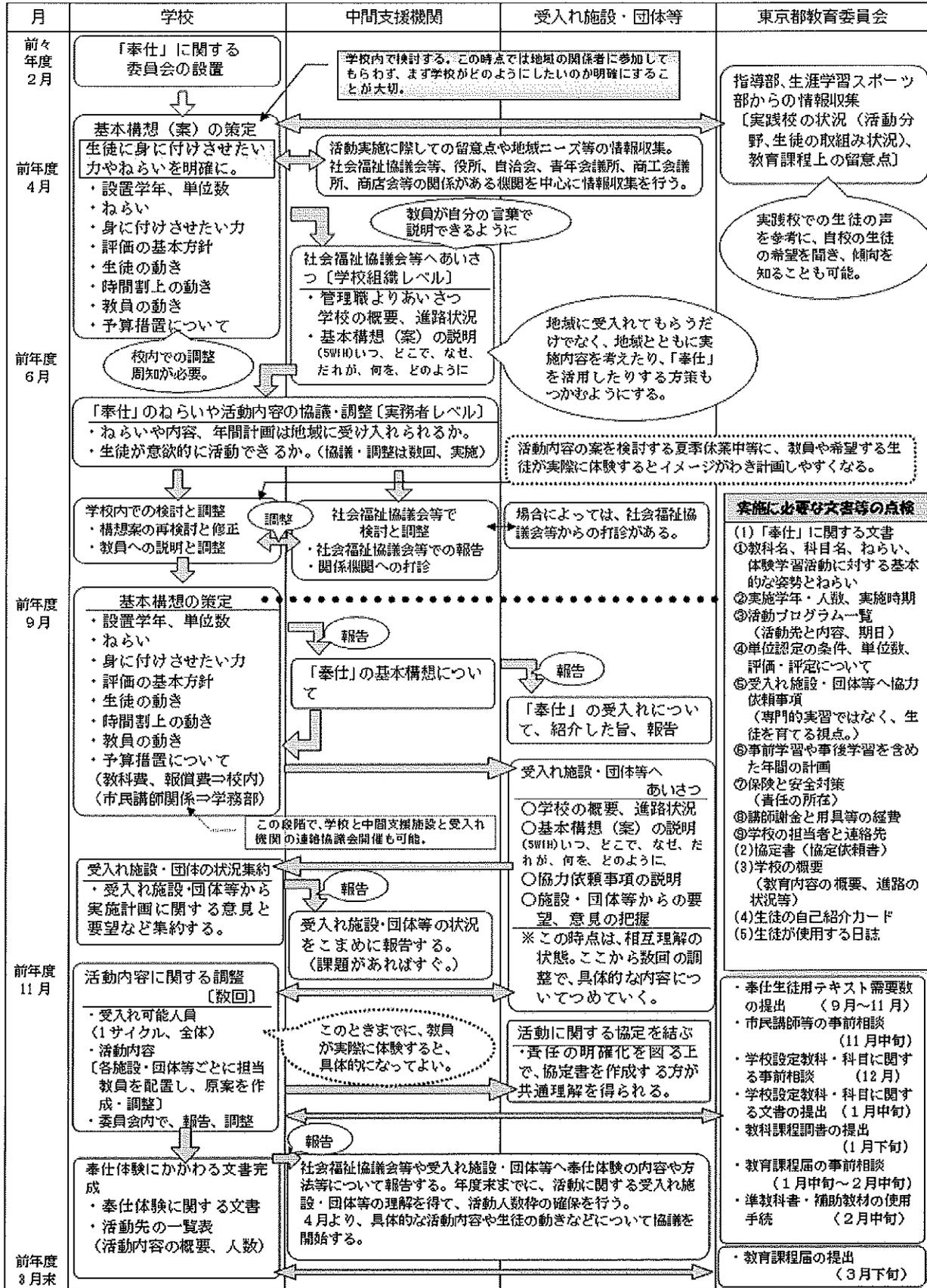
③ 体験学習後（課題の共有化を図る）

⇒生徒の感想などを速やかに活動先の方に提示する。活動先の方々も、生徒たちがどのように感じたのかをとてもしらたがっている。うまくいかなかったことも含め、熱いうちに生徒の生の声を届けることで、学校と活動先とのコミュニケーションも深まる。

⇒活動先の要望を早い時点で確認をする。生徒の態度や意欲など早い時点で聞き取り調査などを行う。特に、意欲が低いと言われる事例の場合は、活動前の生徒への落とし込みが弱かったことや活動時の指示が生徒にマッチしていなかったことが十分考えられる。次年度への継続を考えるならば、早いうちに修正すべき点を洗い出す必要がある。

<参考>教科・科目「奉仕」導入の準備過程と留意点

教科・科目「奉仕」の準備を円滑に行うための、学校としての取組み例を示す。



4 本校文化祭での生徒の活動について

平成23年度の本校文化祭（10月1日・2日）において、2年A組では、クラス企画「がんばろう東北」として、宮城県の物品を販売しました。いわゆる特別活動の時間での取り組みですが、生徒同士の動きがうまく働き、思った以上の成果があったと感じたので、ここで紹介します。

震災から約500日が経った現在でも、東北地方の各地域では、まだまだ震災当時の状況が残り、コミュニティも亡くなった状態の地域が多くあります。そのような状態の中で事例を発表するのは心苦しい面もあります。しかし、東京では震災の報道も減った中、東京の高校生もこのように東北に少しでも関心をもって活動することができると思ひ、関係者にあてた報告書から紹介させていただきます。

（1） 東北の物品を販売するきっかけ

高校の文化祭では、生徒たちは「飲食関係」の企画を立てたがる傾向がある。2-Aも同様であり、飲食関係で企画を立てることとなった。

企画を立てるにあたり、東北にすることができないかという声があり、東北のジャガイモを使った「じゃがバター」が企画された。しかし、文化祭の企画は3年生が優先であり、惜しくも企画は通らなかった。そこで、生徒たちは何をするか考えた。生徒部の先生から「東北に関する企画は良い。」との評価を受けたこともあり、「東北の物品を仕入れて販売する」という方向で動くことになった。

（2） 販売に向けて留意したこと

商品を仕入れて販売するのは、一般の販売店で行われている。学校の文化祭であるから、担当の生徒が実際に電話をして、商品を開発した経緯や地震の状況、文化祭で購入してくれるお客様へのメッセージを聞き取ることにした。

また、文化祭で商品を購入してくれたお客様に、商品の製造・企画元の方々にメッセージを書いていただくことで、私たちの気持ちを伝えることもできるのではないかと考え、教室に商品ごとの模造紙を貼り、人型の用紙にコメントを書いてもらい、届けることとした。



（3） 販売商品の一覧

うめらむね	宮城県立大河原商業高校企画 地元大河原産の梅を使用したラムネ
たまげ大福 だっちゃん	企画：宮城県立女川高校 明治学院大学の学生 製造：石巻市大沼製菓 「笑顔・幸せ・楽しくなれる」をコンセプトにした3つの味があるミニ大福 製造元より、1個につき25.5円の義援金が被災地に送られる。
がんばろう 日本サイダー	宮城県仙台市 トレボン食品株式会社 製造販売 製造元より1本につき10円の義援金が被災地に送られる。
萩の月	宮城県 菓匠三全 仙台銘菓

（4） クラス企画のポイント

①企画製造元の状況について生徒がインタビューをさせていただきました。

インタビューの内容（企画理由・被災の状況）やお客様へのメッセージの掲示をしました。

・高校で行われる物産展だからこそ、ただ商品を販売するのではなく、相手方の状況について知ることが非常に大切であり、それをお客様に伝えることも重要なポイントであるので、その点は、何度も生徒に伝えました。

②うめらむねの販売について、クラス内で一人ひとりが考えました。

原料の梅に暫定基準を大きく下回るセシウムが検出され、販売するか一人一人が考えました。

③東北地方出身の写真家の方々（2名）が撮影した現地の写真を展示しました。

ある生徒が、別のイベントで東北地方の写真が掲示されており、貸していただけないが依頼。

・本来は、文化祭なので生徒の作品の展示をすることが基本ですが、現地に行くことが難しい生徒にとって現地の様子をより直接的に知ることができる良い機会と考えています。また、生徒自身が写真家の方へアプローチをしており、人とつながるというポイントをクリアしているため、進めました。

・文化祭前日には、写真家の方が教室まで来てくださり、写真を交えて、現地の様子や私たちができることはなにかという問いかけ、高校生へのメッセージなどを伝えていただきました。他のクラスの生徒たちが下校をし始める中でも、静かに吸い込まれるように話を聞いていました。

④来場されたお客様（希望者）に企画製造元へのメッセージを書き添えていただきました。

⑤生徒も一人一人メッセージを書きました。

文化祭終了後に、クラスの企画を終えての感想文を書き、今後につなげるようにしました。

⑥メッセージと感想文については、現地の企画製造元の方々に届けさせていただきました。

⑦地元の国立市ボランティアセンターの職員の方々にもお越しいたごき、生徒へのエールをいただきました。

⑧読売新聞の多摩版で紹介していただきました。

クラスのまとめの生徒たちは、文化祭前日の準備が終了した後、自分たちで文面を考え、教室の写真を撮影し、メールにて「お越しいただけないでしょうか」と依頼をしました。その結果、取材を受け、記事にさせていただきました。

(5) クラス企画実施までの大まかな流れ

6月：東北支援のための飲食「東北ポテトのじゃがバター」を企画するが、選から漏れる。

7月：東北関係の物品を販売することに決まる。生徒には、見通しがなく、動けない。

9月：販売商品に関わる企業や学校に電話を始める。写真家に写真貸与の依頼。具体的に動くようになり、生徒部の先生やボランティアセンターの方にアドバイスをいただき、準備を進めた。

10月：文化祭本番 取り扱った商品は完売。お客様に書いてもらったメッセージを現地へ届ける。

(6) うめらむねの販売について

うめらむねは、宮城県立大河原商業高校が企画をした、地元の特産を扱う商品で、東北6県の生協87店舗で販売されていました。みやぎ生協のホームページには、原料の梅についての放射性物質の調査の結果がでており、暫定基準値500ベクレル/kgのときと12~13ベクレル検出されていました。クラス内でこの商品を販売するかどうか、考えることになり、アンケート調査を行いました。

<生徒の考え>

①見合わせる <放射線の理由> 9人

- くる人は絶対放射線を気にするから、少しでもあるならば、「なし」の方がいいと思う。 ○罪悪感を感じる。
- やっぱり、今は放射線の話などもあるので、いくら基準以下でも見合わせた方がいいと思う。 ○売れないと思う。 ○買う人とか、やはり敏感になっていると思うから、売れないと思う。 ○放射線に不安を抱く消費者が多い今日、少しでも放射線があると分かれば、この商品だけでなく、他の商品のイメージダウンにつながる可能性もあるため。
- 実際、放射線なんて大丈夫だと思う。事実、飲んでみてもいいだろうし。でも消費者からすれば、今世間で騒がれているものなのに、平気なのかと不安もあると思うから、だったら安全なものを提供するのがいいと思う。売る側でなければ全然気にしないけど。

②見合わせる<その他の理由> 5人

- 放射能は全然心配ないが、別の飲み物も売るし、資金も決まっているし、梅は好きな人嫌いな人で差があると思うので、話し合うべきだと思う。
- 梅は好き嫌いがあるから。ラムネなら、普通のラムネがいい。 ○どんな味かわからないから。

③う〜ん 1名

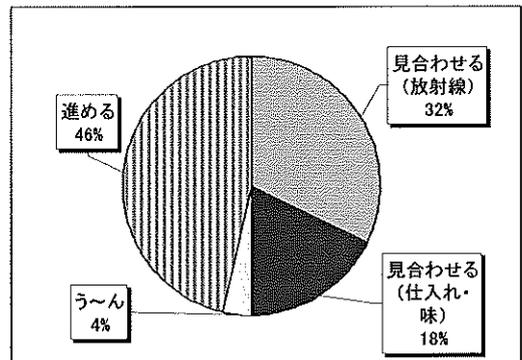
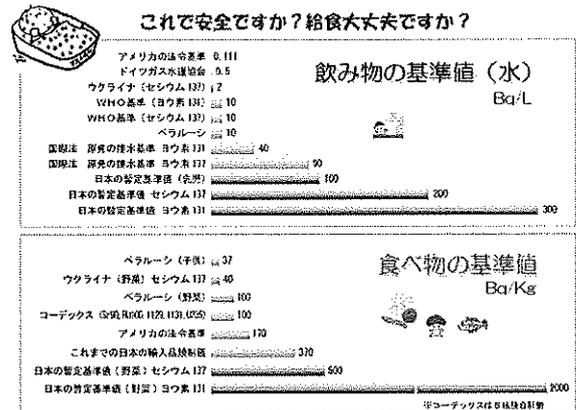
自分的には売ってあげたい。でも、消費者の中には、放射線を気にする人もいると思う。だから、販売するかは考えた方がいいと思う。

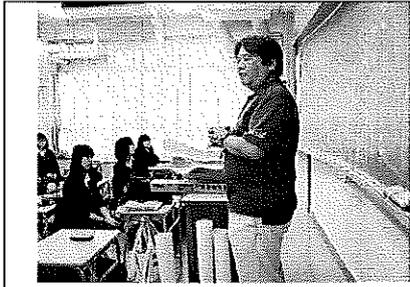
④進める 13名

- 普通に売れる。 ○復興に向けて頑張っている方々を応援したいから。
- 厳しい基準値以下であるから大丈夫。 ○少なめに仕入れて、ちゃんと売る。
- 低い数値であり、たくさん飲まなければ大丈夫であると思うから。
- 基準以下なら大丈夫だから売る。いつまでも気にしていたら、何も食べられなくなる。(本当に体に影響がないか。)
- 飲んで体にも異常がない数値なら良いと思うから。
- 少しなら大丈夫だと思う。10~15と言っていたから、一人で33本飲まなければ大丈夫。
- 低い値だから大丈夫。表示しなくても販売していいなら、表示をしなくてもいいと思う。おいしいのかな。
- 放射線の値が出ていても、そんな毎日食べなければ、体に影響はないので、別に平気だと思う。

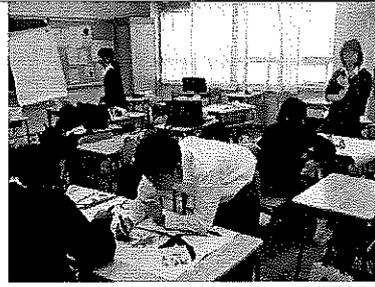
アンケートの集計結果を生徒に配布した。生徒たちは、その集計結果を見て、黙ってしまった。どうすればよいのか、何が正解なのか分からない状態で、決断を下せないようであった。時間が過ぎていくので、教員から、ベラルーシの基準と、原料の梅はもともと数%しか製品に入らないことを考え、販売してはどうかと提案した。生徒たちは、納得したようで、販売することが決定した。

(7) 生徒の様子





ボランティアの方のお話



準備をする生徒



写真家の方の話を伺う 1



写真家の方の話を伺う 2



作業も大詰め



文化祭初日



1日目午後 読売新聞の取材



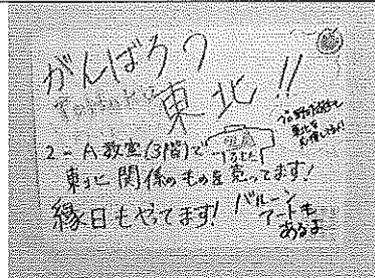
教室の様子



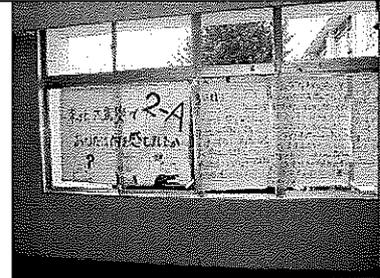
応援メッセージ



提供いただいた写真



柱に貼られた宣伝チラシ



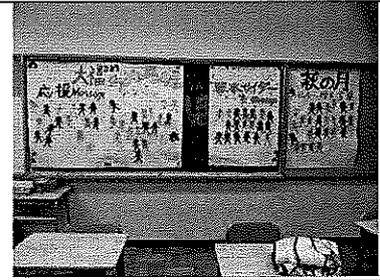
廊下に掲示した
生徒のメッセージ



子供向けに
バルーンアートも用意



子供向けに
ボーリングゲームも用意



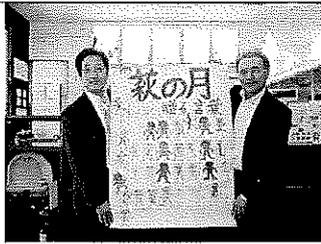
完成した応援メッセージ
これから届けます。



メッセージをバックに記念撮影

(8) 応援メッセージを届ける

文化祭が終了した翌週の週末に、担任1人ですが、販売させていただいた企業や学校を訪問し、生徒とお客様が書いたメッセージを手渡しさせていただきました。



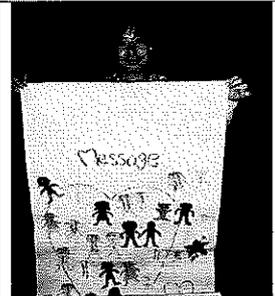
菓匠 三全 様へ



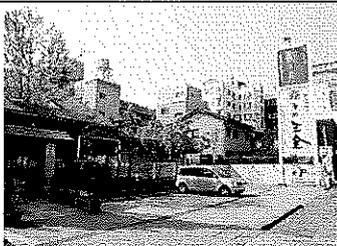
宮城県立女川高校の
生徒さんへ



トレボン食品
株式会社様へ



宮城県立大河原
商業高校様へ



菓匠三全では、製造工場のタンクの破裂などの被害がありました。全国から、温かい気持ちが寄せられて感謝しているとのこと。今回も、このような高校生の温かい気持ちのこもったメッセージをいただき嬉しいです。社長にも見せ、事務所に掲示してくださるそうです。



トレボン食品では、地震の被害で工場内部が大きく被害を受けました。今回、通常では扱わない100本の販売でしたが、このような高校生からの激励のメッセージを受けて、本当に嬉しい、ありがたいということでした。
この高校生からのメッセージで元気をもらいました。頑張っていきます。よろしくお伝えください。とのことでした。



女川高校の生徒さんは全員無事であったそうですが、ご家族が亡くなられたり、家がなくなり現在も避難所にいる生徒もいるそうです。そんな中、大福の販売で元気になろうと礼儀たたく販売していました。模造紙を渡すと、大沼製菓の大沼さんとともに、一つ一つ覗き込むように書いてあることを読み、笑顔で話し合っていました。石巻専修大学の学園祭会場にて。



時間の都合で、商業研究愛好会の顧問の先生にお渡ししました。地元産の梅についての放射線濃度の測定など、地元自治体が費用を出し、町と学校が一体となって、様々なことに取り組む熱い姿勢について話を伺いました。大河原商業高校のうめラムネは、生協でも販売していました。生徒たちが考えた商品が普通に売られえているなんて、やはり驚きです。

(9) 文化祭で2年A組に来られた方の感想より

- この企画で少しでも復興の役に立っていただければすごく嬉しいです。これからも一緒に頑張っていきたいと思います。 ○ちょーよかった。寄付されるのがとても良いと思います。
- 大震災後のみなさんの一生懸命に生きる姿をみて、忘れかけていたものを再認識しました。ともに歩む。 ○この悲惨な事実を伝えるのはとてもいいことだと思います。
- すばらしい企画だと思いました。大福もおいしかったです。
- 東北応援の高校生の勢いに感謝しています。これからもこの気持ちを大切に、後輩にも受け継いでください。来年もまた来ますので、頑張ってください。明るく元気に、高校生活をエンジョイね。 ○とてもよい企画だと思うけど、藤田先生があつすぎる。
- ただ売るだけの企画ではなくて、応援メッセージを書いてもらって、それを送るなんて、素敵。いいぞ2A。 ○「うめらむね」おしかったです。「たまげ大福だっちゃ」もおいしかったです。
- 企画に感動しました。このような人々の魂を揺さぶる企画がもっと増えるとよいと思います。生徒たちがよく協力し合っていて、雰囲気ばつぐん！！
- 食べて東北の応援ができるというのはいい企画だと思います。少しでも協力ができてうれしいです。美味しかったです。
- 五商の生徒が関心をもち、こういう形で参加してくれたこと、うれしく思います。地元の方と相談しながら復興に携わった事は、将来の糧となることでしょう。

(10) 2年A組の生徒の感想より

- 責任者企画係として、まとめるのは大変だったけど、クラスみんなが手伝ってくれて、文化祭が成功できたと思う。普段余り話さない人と話せて楽しかった。
- 少しでも、宮城県のことを助けられたような気がした。自分でもできることはこれからもやっていきたい。全体的にどのクラスもまとまっていたよかった。
- すごく貴重な経験だったと思います。少しでも東北の現状をたくさんの人に知らせることができたならうれしいです。○「がんばろう東北」をやれてよかった。楽しかった。
- クラスみんなが仲良くなれて、すごく楽しかった。合唱祭も、優勝できるように頑張りたい。
- 楽しかった。とてもいい企画だったと思います。来年もいい文化祭にしたいです。
- 準備をもっと早くしていればよかったと思います。
- もっと準備を早くやって、もっとすごいものにしたかった。内容は良かった。楽しかった。服装とかは、もう少し自由のほうが楽しくなると思う。2Aはすごかったと思う。新聞に載る文化祭は余りないので、いい経験になりました。○楽しかった！新聞デビューも果たせた！
- 呼び込みが難しかった。笑顔に努めた。立ち止まって、メッセージを読んでくれてよかった。
- 文化祭でたのしみながらも、宮城やその他の被災地に貢献できてよかった。
- もっともっと盛り上がりたかった。でもA組楽しかったよ。ありがとう！
- 去年よりもすごい楽しかったです。商品をあわせることだったり、お金の管理だったりいろいろ

(13) 担任より

今回のクラス企画を通して、高校生のもつ力（勢いや行動力）の大きさについて、改めて学ぶことができました。東北の方々から直接お話を伺い、それを友人らとともに模造紙に書き出すことで周りの人たちと共有することができました。また、国立市ボランティアセンターや東北出身の写真家の方からの話を聞き、応援されることで、多くの生徒が自分たちの活動が認められていると感じ、より生徒たちが自分のこととして感じて行動することができたと思えました。文化祭の前日には、生徒たちは、自分で新聞社にメールをしました。そのことで取材を受け、自分から社会にかかわっていく大切さを感じたと思います。

文化祭終了時に、何人もの生徒が「なんか、やりきった感があるよね」と言いあっていました。少しでも自分から行動することの大切さを学び、これから自分の意思で社会に関われる一つの経験になっていればよいと感じました。

また、文化祭後の週末に担任が仙台・石巻に模造紙を届けることになりました。その報告を学級通信として載せました。すると、普段はじっくり読まないプリントを食い入るように生徒たちは読みました。自分たちが少しでも現地とつながっていると感じているのではないかと感じました。

今回の企画を通して、生徒一人ひとりが東北地方について心に留め、自ら社会にかかわる大切さを感じてくれたのでは、そして生徒の力をあらためて感じました。関係のみなさま、ご協力いただきありがとうございました。

今後も継続して、生徒たちへ情報発信を行い、東北地方の事を心に留められるようにしていきます。



5 本校 同好会の東北に関する活動

平成22年4月に立ち上げ、約1年が経ち、地域の高齢者デイサービス施設での活動が定着しつつあるときに、東日本大震災が発生しました。

生徒たちはなにかをしたいと考え、3月から4月にかけて、校内や街頭での募金活動や校内の辞書を福島県立相馬東高校へお渡しすることなどを行いました。

しかしそれ以後は、10月の文化祭で、通常の活動の紹介と顧問の東北でのボランティア活動の紹介と東北に向けてのメッセージなどを書いてもらう程度で、上記以外の活動を行うことはできませんでした。

高校生たちからは、現地に行き活動をしたいと何度も言われました。しかし顧問の私としては、高校生が現地に行くことは大切であると感じていたものの、日帰りで訪問するのは難しい距離であるため、躊躇してしまう部分もありました。

(1) 他の高校生たちの動きを知る

そのような中、11月に東京で行われたボランティアフェスティバルでは東松島市の高校生が体験談を話し、栃木の高校生も現地での活動をしていることを知りました。

2月には、福島県立小高商業高校の生徒さんのプレゼンを多摩市の恵泉女学園大学で聞く機会もありました。また、都立高校生も奉仕の授業で連携をしているNPOに個人で参加するという形で東北に行っていることも知りました。

(2) NPO法人「地域の芽生え21」に参加

そのような中、NPO法人「地域の芽生え21」という団体が、石巻市等を中心に活動をしていることを知り、5月に私が参加しました。すると、参加者の70～80%が女性であること、しかも若い方が多いこと。真に、地域の方々の目線に立った活動を行い、信頼を得ていることを感じました。

そこで、この機会を逃すと生徒たちは、東北での活動は難しくなると感じ、他の都立高校と同様に、信頼あるNPOの活動に、生徒が個人として申し込み参加するという形で実施できないか、管理職への相談、企画調整会議、職員会議を経て生徒へ提示することになりました。

すると、部員11名のうち5名が参加することになり、平成24年7月6日～7日にかけて、石巻市に行くことになりました。

以下、その活動報告を紹介します。

活 動 の 記 録

平成24年7月9日

平成24年7月6日(金)夜～7月7日(土)にかけて、宮城県石巻市に行ってきました。

今回は、個人で申し込んだ本校生徒5名(3年3名・2年2名、ともにボランティア同好会生徒)と同好会顧問の計6名での参加でした。

今回の活動の内容〔概要〕

石巻市の旧北上川に近い湊町地区、2mを超える高さの津波が押し寄せ、多くの方が亡くなられたそうです。コミュニティーがなくなってしまった現在、この場で盆踊りをするだけで、少しでもコミュニティーの再生ができないかと考えたそうです。

震災により空き地になった場所を会場に、盆踊りをしたい。しかし、地面にはガラスを含むがれきがある。サンダルなどでゆったり楽しんでもらうには、安全な場所にしないといけない。

〔活動内容〕

会場となる土地の土からガラスなどのがれきを取り除き、安心して盆踊りをする環境にする。

〔活動の様子〕



再開した店舗とそのままの店舗が混在

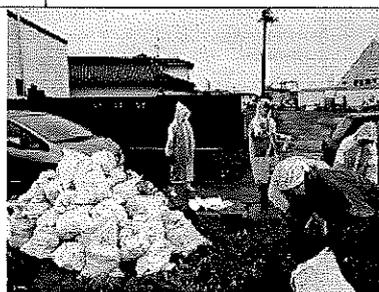
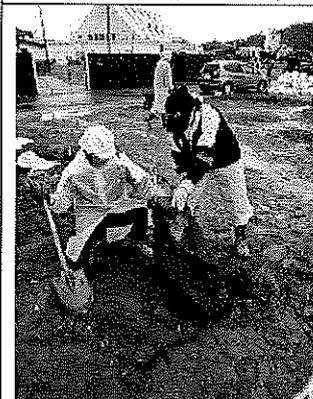


まず石巻の復興を考える市民の会の藤田さんの話を聞く。コミュニティーの再生について語る。



会場となる場所の雑草を抜き、土の表面を削り始める。
雨の中の活動で、カッパを着ての作業となる。

ガラスの破片がザクザクで



すぐに土嚢袋の山ができる。
雨と汗でグジャグジャになる。

大きな石も埋まっている。

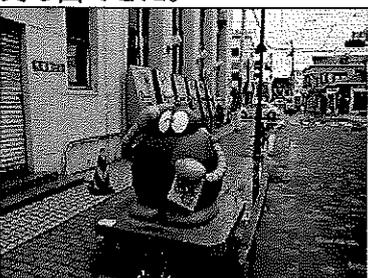
土嚢袋につめる係をする。



活動に参加する50名がお弁当
をいただく。近所の復活した商
店のおいしいお弁当
この建物もボランティアの手で
最近復活した。

午後も、活動継続。
ガラスなどの分別。
加湿器のタンクや茶碗・プラス
チックのかけら、木片、古い硬
貨も出てきた。

本日の活動が終了し、
本校の生徒たちと都内大学の学
生さんと写真撮影。



近くの銀行も1階部分はそのま
まのようでした。

石巻中心地にて、ロボコンに会
いました。

東京駅に到着。バスを見送ります。

※この活動に参加した生徒2人より、活動を通して感じたこと・学んだことを皆さまにお話しします。
私自身、生徒の感想を聞き、現地に行くことの大切さと生徒一人一人の学びの深さについて、再確認
をしました。ぜひ、生徒の感想をお聞きください。